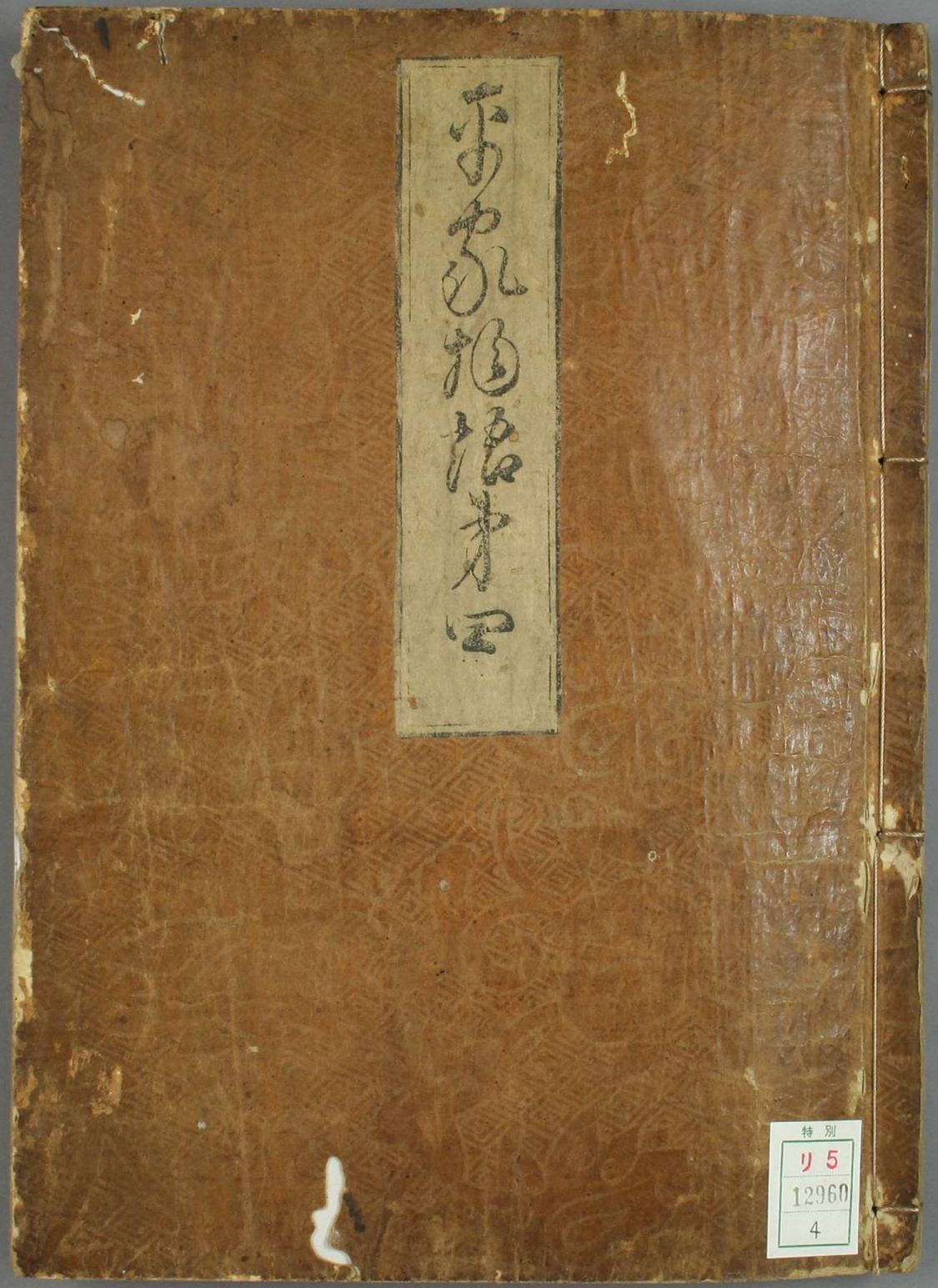
特別
リ5
12960
4

平家物語善光寺四月縁
起鴻沙幸付還洛
鼈沙汰
鏡
南都滅亡
大原撰
文治元奴
物語
源氏物
信連
山門滅亡
也錄
橋合戦
義仲討死
三井寺衆上

小汀氏蔵書

58 2069

宮城縣圖書館

治承四庚子年正月一日 鳥羽殿より
院を法皇もおはしまさせ給ふ
日元三の間年入せ給ふ人もなくさまとも
中なれば御子息摂政殿
言成卿(シゲ)をつかはさる大夫史(フミ)隆職
さまでてまゐられ廿日 春宮(キ)法皇并
御所へ渡御ありてなほ事をこのまし
のともに法皇も鳥羽殿
そさまあらせ二月廿一日主上おはなる

まるうとそう新帝と三歳あつまいとの
なる禮位りあと対のくらゐをうの浮めせ帥
そう平大納言時忠つきて
従代文ふるによりてとゞまれ讓位ありて
なりとたまてのぼりふきやつ天皇
藏王二歳豊の穆仁親王二歳の朝まをを遠院
三歳六条院二歳ふまみるまやうの中
かたくまれて衣冠をたくしうをさつしう
とも藏を持出奥て位ふたの成も母后いく
いつくねよのそひとそ見

帝そひとまて百日といふか践祚ありて
位をゆひ先踏ふ澄りくのこと
ありまとその時の人ゝ徹れ人ゝおろう
相かまとうされそうれそよう御とも
うやとそはふやかのうを入をおる春更くる升
よつをおつのを入をお園史婦ともよ升初
冥加祖母とて准三后の壹岐をのう山ま
皮屋爵を許く上日の人ゝ浮のひ統
りさ花法をふる結とをもお入ひふ院更ま
めてそてそありけるお前の人ゝ渥三后

の盛衰をのぞかゝる事ハ法興院の大入道道
兼公の後なり同三月上旬より上皇安藝の厳
嶋へ御幸なるべしと聞えしかば帝王くら井
をさりて後の御幸にて諸社の御幸始にハ八
幡賀茂春日へこそ御幸なるべきにはるかなる
安藝国までの御幸をいかにと人不審
をなせば或人の申けるは白河院は熊野へ御
幸後白河院は日吉社へ御幸なりき既にしん
叡慮にありといふ事なし御心にふかき御立
願ありその上此厳嶋をば平家なのめな
らずあがめうやまひ給ふによりてあひ
うへにハ平家に御同心あり法皇のいまだ
つきせなく為羽數に押籠られてわたらせ給ふ
も入道相国の心も和らげ給ふの御祈念とぞ
のきこえしかるに山門の大衆いきどほり
して上皇既に諸社の御幸始にハ
石清水賀茂春日へ御幸なるべきに安藝国まで
山王へこそ御幸なるべけれ安藝国まで
の御幸をいつの習ぞやかゝる事なくば
神輿を振下し奉て御幸を留め奉ん

とうりやうあられかよひてもらく汚延引
ありてその入をお国やうくなるべく急ぎ
もふ門乃大急しまぬ同十七日上皇薨
鳴汚嘗れ汚門出とて入をお国のみ方二位
汚れ給ふい条大文へ汚事なるうれ日やの
て薨鳴れ汚神事もめ〳〵るその日のくれ
ぬるふ汚下よりの伝くるまうしの
馬なとおのるる十八日入さお国
れ亭へいるをおもふ大将宗盛つて
うくの日いれ鳴汚まれいそて鳥羽

汚へ来て注意乃汚見条なりともやとおや
ふのすをお国務門うなんなふうきすしてそや
うとなんやや作げまぬ宗盛卿何様うやう
うへまとそうきうまぬとけまてさう急汚
と鳥羽及急来てもやうをやきうと作
それ要害ていうさ急用殿へ参てほや
要害きう急れ注意やあるまおてし
急を汚こととそてあるゆやらんとう作を
るあくる十九日大文大納言入道参いる殿
みうう条て汚事もうまきうの日来

ゐのまゐらへさ努のひて玉体もいとくろう
くしうそろしさをましくける御母建
春門院におくれさせ給ひさらし
つゞき法皇をさへ押籠め院に御事おはしまし
出て御なみだきこえへさせ給ひ其院の
御庭ちりぢりもられまだなき御門前をも人影
かは及ばず御前をも居残りまゐらせはつまじけ
れ共くびをしう御掲示まゐらせさ殿れたし
ましたるに日たきて後御船中さ殿ぬて
鳥羽の草津より御舟にてまめさまゐらする上皇

上皇をば法皇の離宮故亭幽閑寂寞の御所へ
内御心くるしう御覧しありき給へる法
皇をば又上皇の旅泊行宮の浪れうち舟の中
に御めづらしくおぼす御いたくうけ給はりめさ
まゐらすることに宗廟は幡(?)なそを行
とものを修てまゐるべくと安芸国までの御幸
をし神明もなどかの御納受なかるべきと作文
成就ぞこのひなしとぞみえさせまゐらけり
六日厳島へ御参着入道相国の最愛の内侍
の宿所御所になりける中十二日御還幸ありて諸

舞楽(ブガク)などなら法楽(ホウラク)の導師(ドウシ)まで乙(ユウ)な役(ヤク)
でも座(ザ)のかず丈(だけ)の褒美(ホウビ)(ヒョウニヤク)のことでもあらうから一番(イチバン)めの人(ニン)の部(ブ)をおさ駒(こま)のひいきもそこそこにくとこまごまと
書(かき)つらねたる中(なか)さまざまなる評判(ひょうばん)(ヒョウバン)のなかに大(だい)
分(ぶん)(ブン)褒(ほめ)(ホメ)つるもあり又(また)悪口(あっこう)(アッコウ)(ワルクチ)をいふもあり
いらをもふ(ウ)(ケン)ず褒(ほめ)(ホメ)つるを山(やま)ほどまとめて
文(ぶん)ともに町(まち)つるを山(やま)ほどまとめて
書(かき)つらねたる中(なか)さまざまなる評判(ひょうばん)(ヒョウバン)のなかに大(だい)
分(ぶん)(ブン)褒(ほめ)(ホメ)つるもあり又(また)悪口(あっこう)(アッコウ)(ワルクチ)をいふもあり
いらをもふ(ウ)(ケン)ず褒(ほめ)(ホメ)つるを山(やま)ほどまとめて
文(ぶん)ともに町(まち)つるを山(やま)ほどまとめて

雲井(くもい)よりおちくる滝(たき)のたまづさ

契(ちぎ)りをむすぶこと

神主(かんぬし)佐伯(さえき)(サヘキ)京鹿(きょうか)(キヤウカ)が湯治(とうじ)(タウヂ)上立(たち)
志(こころざし)なかりきまでか湯婆(ゆば)(ユバ)下(した)(シタ)女(おんな)(ヲン)やうて後(のち)の
殿上(てんじょう)ゆるさる子産(こさん)主(ぬし)永注服(えいちゅうふく)ふなさる神慮(しんりょ)(シンリヨ)
もうちうへをお園(その)れんもなつうきぬひぬ
らんとそみそ一同(いちどう)女九日(おんなここのか)汚(けが)(キヨ)毋(なかれ)うさこけて(クヒ)
汚(けが)(キヨ)なるわ子汚風(けがふう)をけしうるそれを汚
毋(なかれ)れもとさ娶(めと)その日(ひ)を紫鴻(しこう)のうちあり

れうちといふ所まで
明神社清名社打つみふ
まで隆房(ナガフサ)お伴

たちの色々なこうもり
扇もやくみ出ひくふ
数寄もの風しまで
扮て出舟とも大氣出さう
さきなのとまるまで
保れころほひ一統清華
のぼりなりける清原

お国清まふけよもう
上皇うまで清華をな
日良房(カド)とふことれ
まの部のまを当ひて
ほまる松の枝なを
けるを上皇殿御ん
うとまで作まで大史
左史生(ザシ)中一原康定(ヤスサダ)うこし
清名を出さと結ぼ挙
のりすなのもを松の枝

ゑ〳〵きようけまでをありなて作られて浮嶋のうき巻うきの花ふて立たつのまつまをめくと張なれを陰大池をちとせへん老つよもひよ苔なその二日を備前國兒嶋のとまりより發ふ五日を晴て海上もけうけまを浮ふの浮私をもめゑうきく人〳〵共ともに皆こきいてを雲乃波間のかみをまきたつ發ふひてうけ日を播磨國やまれうま

つをふうまよりら船おれまて浮興よりうく福岳へいさよ就てもそのうつを絵をけ人くいつ一日もさ遅前をて福原乃とうろくをみふ屋形ふまて浮ら巻をうるよくふ七日まくつをたく發ふて入きお國の芸子母波ち浮就ふ下四位用うま入道のまこ朝おかしその日てう井ふ浮興の發給八日浮興の

乙つ汲上人鳥羽乃寺まてまいるまてそら
還洛のときも鳥羽汲てて洛幸もなくて途
より入給ふ国ゝ条ゝ亭へうつりをおて
ます国廿二日新帝の洛御位あり大赦汲ま
てゝおはしますも一度突上の姫
らいかるほくともおさまを大赦敷なうらん
うゑを太政官の廳そおこなふ条ゝ
とゝつ衆議ありて九条汲やさせたま
けるを太政官し廳を見人の乱おとゝめゝ
ゑ不てい乃不なわ大赦汲なうむうゑを

恋愛汲うてそう洛部位をあるへそれとや
さ変多人をたくむてんそう洛御位も有
けるいまて應保四年正月十一日改永保乃
洛そくぬしくむてそありしま上洛
称義ゟりて大赦汲へ行幸うおはさうま
洛ゆへなりその御
給三条院の延久の
の廳そおこなひまう勢て太政官
ありまけまともそうせんとうへそ左大

しうし申一家を弘徽殿(コキデン)より仁寿殿(ジジウデン)へ遷(ウツ)して
やうく当院(トウイン)へ参(マイ)らせ給ふ程(ホド)に
御仕(オンツカ)へまつる女房(ニョウバウ)小侍従(コジジウ)のまんたち
ケンジウの口(クチ)へ参(マイ)る年太后(タイコウ)おはしまして
経君(ケイクン)をとられまいらせ給(タマ)ふ程(ホド)に
伝遷(イラン)礼(レイ)なくめでたき事(コト)ども
つもり盡(ツ)きて入(イ)らせ給(タマ)ふ
色(イロ)ゑらをよりすぐりて
もれなるかやうのみそたき事(コト)をあつめ
とも也(ナリ)同(オナ)じ事(コト)をかくしるしつ

法一院(ホウイチイン)第二(ダイニ)の皇子(オウジ)仁親(ヒトチカ)と申(マウ)しし法(ホウ)
母(モ)が宮大納言(ミヤダイナゴン)季成(スエナリ)の御(オン)むすめ
盃(サカヅキ)まいりを持(モ)ち給(タマ)ふ会(エ)の
おなじ永暦(エイリャク)元年十二月十九日(ジフクニチ)の暁(アカツキ)法(ホウ)
住(ジュ)寺(ジ)の僧(ソウ)正(ジヤウ)を戒師(カイシ)として
うの小法(コホウ)光明(クワウミヤウ)の法(ホウ)を行(オコナ)はせ
そして法華(ホケ)経(キヤウ)もをはりまいらせ
本尊(ホンゾン)のまへを立(タ)ちつゝ
院(イン)の法(ホウ)ふかくたのもしき
花(ハナ)やかなりとぞ見(ミ)えし

の子とも伊賀守義光養子羽柴左兵衛督秀勝
人光重か羽柴左兵衛督秀勝と称し筑前守
為勝の末子十郎義盛と称し初津
國よりそ多田先人の形跡をそうへとも新大納
言成親卿の孫對馬守とさしたるしるしなく退
忠をつくす子孫両人ありてさうなくもその
奥州鳴尾高野太田次郎頼基汗明國より
武蔵相模へ移住石河判官代義兼太
和國よりそ暫七郎親治の子とも太郎左治
次郎清治三郎成治四郎義治江國より山
本相模織部濃尾張へ移住山田次郎重實河
邑太郎重忠和泉太郎重氏浦野四郎重安
倉次郎重教その子太郎重賢其子太郎
畔田判官代重國矢嶋左兵衛尉重生重宣その子太郎
重明平野国より遠見冠者義清かゝ義次郎義光
太郎清光武田太郎信義小次郎忠頼板垣三郎重信逸
見兵衛尉清一条次郎忠頼甲斐四郎信光安田三郎義定信
浅国より大内太郎維義香田冠者親義平賀

義家國義を子の四郎義
の次男未弟冠者義綱
滿仲頼朝等滿國まで
行冠光之義その子大
永吉敷立欽第參陸奥國
うまご九郎冠者義經
苗裔多田新發意滿仲
をたいくお若望をと
ま勝劣なくまくう
大雲流まりうとを

れをとり國司まうび
みのくにくれ
まそやといんもいる
をみいるうをまそ
をいの平氣とそ称
おほめたく發のた
なるし國この源氏とも
をのかと平氣とやう
くうかさん事ハ時日をめ
へやもりのさ子とも

て来りいてしとうの事をものことい
うくをんとこおそしやつ日つゝをおひく
もとしし（汚）穢堂もなくりくることにのよ
九大洲そ（ヒエ）稗（ヒエ）おお日（ヘ）書毎うる
おお細を稗（ヒエ）もとやしをくまくうおくん
望けまそやさの人おおお細をそ中けろ
その人もの文をみさりて位つをふ
（ニハ）稗（ニハ）てそ下れあやおお
ほのつもたをふ色うくすとやけろ
うもいさまさ三位入をもかやうみすくろん

さまけまそさそもを強るへそ天照大神の汚
はやらんとそひくと初めくく
をおひ来り文新文れ十所義國（ヒクニ）をつくろ
人なさふ形亂と改名して今毎（ヒクニ）れ位使な
来國へうト下さまそのれ日廿八日部を主
てを江國よをおて数濃色位の原氏ともな
澤ふあれてトふほとなる又月十日伊豆の
小澁小若て海人ふ兵衛佐教まやう志
とう出てまる信太（シダ）之原之生数おなれ
もとくをんとそ信太の浮嶋へそる本当

冠者義仲を矯(タメ)なれとそ山をへつ
剋(たち)きるを法經の列(ならび)源濱(みなもと)湾を率(ひき)る手思
乃方なるまつのなんとそ
む新文の十底義國こそ
志のこつて況ん孫勢(まご)
文乃ものともをさそめて源氏のお人そう
きんすそん憑(たのみ)湯(ゆ)を事乃浮世を面山よ高
なまものてうむさまるつか矢一対う
筆てその後郎へるお
一千餘人新文れみかやへもつうを新文

おそ島井法眼(ホウケン)坊かうそんふらひまを
き井経(たて)本水屋藤の平孫(まご)をも挽(ひき)乃法眼(ホウケン)と
下郎台そのせい二十餘人ときぼくつま矢合
して源氏れ叫くふをとう対き事高のお
まそのうそう対事と矢(や)をひ乃おう
の返報(タイテン)をなく綸(カラ)乃なく三
日のほどそう郎ふるむひをもなく三
たんそそうも高子承お知おうこをまう方
まをしうそさいれちの
イタチノサタ
ようをのかつけまさるほまる法皇も感覚後

宮のやうかとおぼさ國もろもろの鴻へもうけされんすもやらんとおぼしのすゑ不堪而の鐘実ふりてと度をこなをおもひます同五月十二日の午刻ちうと鳥羽とのよそいとちおひたくしうちうとさとをは皇ちさまおそろう勢のひて浮うかとをうちまして近江守仲兼ろのとかも霧差人とて仕ちをはおへめうてもれもつて安詠桑(ヤス)軟うとやへゆさきろとうんの色さ変て動ゆととりて急とそ作けろなのうね

こ急とゆて家詠桑親りもとめりわす畜承るさおうとろ不行なる不へてをいひ守急とろ急へたつねゆさて動ゆをとうかいまけ仲兼こ急を急て鳥羽没へ地急の門よりまる〳〵とすれを号(ごう)の轟(とどろ)を業内をしつなをはいひちゆるさそとをふてきちいとうさろ桑軟の動ゆをこそまいとをれ没皇急を穀漬のふよう三日の中ゆ浮ろひなとひみ浮穎(ヤキ)と

うんの色やうやうさめ法皇ふの法ごろ海ま
てを法服をきかへ又いつなる法めか
うあふへきやうんとそ作けり同十三日あ
右大将宗盛つ法皇ゟ御使ありて御
まき参れをへ入をお国やうくおひなを
て法皇をを高羽殿をゟ出(ヒ)
法(ホウ)なりまいり条高尾義福門院乃法華へへ
をろいつ三日のうち乃法ごろあひとそ悉
訳(ヤク)をやけるめくるる事ゟ経哲(キヤウテツ)別当
澄憲(チヨウケン)成勝(ナリカツ)寺ゟてる念文ゟ法深寺の史を

ろやうへやうをなれをお右大将ふ感つた
まさしてをゟ入をお国を福原乃新
業におけるかほろて
入をお国きてもあへ
ほろと色帆ゟ及色のらる
ゑて去位(クラヰ)をへうひけ
子上(カミ)殿(ドノ)ゟ三条大納言(ナカ)資房(スケフサ)卿(キヤウ)事を弁(ベン)官(クワン)
雅(マサ)とうきこと戒士ゟ源大史判官義経
お羽判官義長(ヨシナガ)郎(ラウ)等(トウ)合うれせい三百餘(ヨ)
官乃法服へうもの(ヒ)ひとる山源大史判官と

中ゝ三位入道ハ法名ヲ志ノ字ト人数
ニハイハレケルアヒダ、ソノ舎弟ノ浮縁ヲ
三位入道ト号ス〳〵先中ゝ（ノ）ツラカワ（ヲ）ノ
平氏ハ世ニ〳〵サカリ
カトヲボエシカドモ五ヶ年ノ春ノ雲間ノ月ヲナノ
メサキヌクナルカ如ユクヘモナキヨウニ
サモテアルヨ三位入道ヲ使者トシテ文モツケ
イウツケヨ出来ラン事ノ浮光ヨモコ
ニ条亮大夫宗信ヲ（今）ノレヲトリテ浮ヲヘ（ホ）ノ
ソキヲクミルカ如ク浮縁（ホン）ヲクリアラレ

サ候ヘクニ依ノモトヲウシナハレ
テ友人トモノ約束ヲモ
依イラヌ浮平ヲオサ（ヲ）ノ約束ヲモ（ヲ）ヒテ浮連（ムラジ）ヨ
ラ勢ヲモマヒヲニ
依リンソノ〳〵ヲ
ンヒ勢リ〳〵ヲ世ヲ不
ノヨフラヒヨ長兵利信連（ツラ）トイフ者アリ
ナヽカノヤウモイマ女房ノ装束ニ
ヲサ勢ヒ人トヤケ（イヒ）山伏ノ形ヘシヤ
テ浮ソヲソラウ浮衣ヨ（ノ）ヲ女（カヒ）装

なしたての姫君をさし御抜に入よとて作りける
やうて御後仕事と作かれし信連や忘るゝを
只しかれ御所へ官人ともうけむるひとま
いらせはなるに御前に人一人もはばからん
を殿下小くら打し思存はその上へかの御
所に信連うけ中事は上下みなおそれ候
おしとてこうらへと頼はてさらむをそれ
ときその頼をかきたてまつなとしそれん事よう
ら繁とら方ものうまのとるよう打しうらへ
友人ともにさうらはおひさうひ一方打破

てやりて気のはりんとそしくしきは御所信連
うその夜の装束にはうす青の狩衣の下
に萌黄匂ひの腹巻をきて衛府の太刀をそ
帯たりける三条おもての総門をも高倉面
の小門をもたてにひらいそて待かけたりし東の
ことを源大夫判官兼綱出羽判官光長都合
その勢三百餘騎十五日の夜の子の刻に宮の
御所へおしよせける源大夫判官存する
むねありとおほえてはるかの門の外にひか
へたりかれ出羽判官光長は馬にのりながら門に

うへ打いま〔遍〕遍なひの〔の〕へ大高拝をおきて
やれ法孫判院よりおくられさせ給ひてた
位れをうへうたてまいらせそのたのまの人
ともの列高直を承てまいりあつまりひて来てい
とうくしきむらへとやけまを信連大夫ふ
立てこまを高岡をまいらせ本下ものすほもの
まふてまいそなたことを奉りる細を中
まをうといひまれをお判官何源あの浄
不なりてきいはくこうりをふをうふる
そを弟なりそ下部ともまてさうまをと

うやける信連のさいねて物もおやをぬ皮人
ともものやうの的をなうう門の的へまう
さても幸姫なるよおやさほへ下部ともまを
てさうまをとそのりてやそ長兵衛尉長
治ア信連のうちうようてやまちを
なとういひなる廊の下部の中ふ金武と
いふ大力の剛れ者うう相れさやをほし
信連ま目をうまてたいも大高の上へとひのかる
られをみく同輩ともも十四ま人うほくく
る信連をみくうとさめ(まと)紙ひけまう

てをけるまくふ衛府(エブ)の太刀なれと方をし
んもくらをしるもをそなくて
にこうあるまふたま(カキ)敷を大太刀大太刀か
てあるまへとも信連ニ敷(カキ)れたちみきら
たそられて殿にまの敷れ翌やうう庭へ
さつとうはをよるけるる日十五夜の書間
の月のうこれ出てあのうをする歌を垂
楽面なり信連を楽内老てたちそれもの
そこれ西廂(ニシノヒサシ)を追か出てもときまくの
のけまをを追ひめてもちやうやきろいふ

童の汚名をそうもうやをいひそれ
を宣旨とそ作うめてて太刀ゆうめをなをを
はきをしかもを処ろうをさ老とも十二
ス人そ切ふをしるを始太刀のさ尺三寸計
うちおてをてくまり脇をさしそ腰をさ
れとそ鞘巻着てなりそれや力及ふす
大を汗ひろはくる金面乃小門ようをを
いてんとをふとろそ大長刀おする男一
人まあふようを信連なさるものらんと
んてうれの家(イリグチ)投しそ脇をぬいさまふ

つゝぬう連んをたゝき思へとも大勢の中
にとうこのうれてのまゝとるとうそをきゝれき
まそのほ法華中をすゝ
き給ひす信連りを掴て云ふへぬてきう
おた大将宗盛つ大床る立て信連を大庭よ
ひほをへさせまことたる男きん志の浮
世とおもふをんそとてきう
なをそう廳の下部ともおかを双傷の者
志たんなれを給くれ向志くもの乃和尚
易とひその後河西よ引いるこひく前をそ

意ひけう信連りとゝ
者なわを連そめなゝ
ふをそうのほとあよ浮
うのくひいを行源平れふへとおひあ
なほつて用心も仕らめ不取ものとる
ろふるものとも二三百騎うち入てい
をなふ者そとたつりねてうへきん志の浮
世つひて中商呵も窮盗強盗山賊海賊なと
中やきうの我をさんたちのいをぬふる
う或をきんしの浮世のひなとなの里

きつそく伯耆（ハウキ）の日野へくうなのさまにて
平家おわろ〳〵源氏ハをうちまなつて東国へくる
里梅石平三家村なとハぬてあやその招元一こ
ホヤさうけまつて種食教神おなとを感し
なひて紀伊國なる湯思のうら女うりるとそ安
そくさるほとまうやそうくるをきくへ
を湯をひんの人安芸河をわくをぬくめ
き山へいつをおつてますむうし清見原を
皇うくふおうもれさる紀く吉野山へい
らをなひきるなうしめ（ネト）乃をのくをそう

らをぬそれなれ余ふの文乃湯ありさ海も
うきまをたのそをふ色のらんたくぬ山
路を取もそうくるきいくを湯ふまつな
らもれ湯うとなれも湯ふとうれ湯る
血をいさこそうめてうくまお井れくそ最
おの乃きけみの中乃霧雨さもさくうを平
やうおなしめさまけ（アケ）てくるいら物おう
三井てくるいら物おうひなさ食の
打さた宮統をたのむて入湯りと係雨
まて大宮男ろあんて法輪院ま湯平雨志

つゝひかさうことを乃(ク)俗(ツ)江(エ)ゟ
いゝをきるまよりくわゝ十六日ゟ会(ア)式(シ)文の浄縁
勅(ノリ)なこゝ多勢(ヨセ)ひそ三井ゟへおちさ要(ヨウ)ふ
うやとやりとうりそれ京中(ナカ)ゟ
とうおかのなゝそをこゝ三日のうゟ浄妙ひ
とゝ法皇ゟ鳥羽殿をゟ出さをゟふ浄こと并
か浄教とゝ素(モト)親(チカ)ゟれそやけるゟ柿(カキ)ゟ源三
位入道頼政ゟ使来ものれをこうゟり
けゟふとゝいのなゝ縁(エン)者(ジヤ)をもおこ
さまゝなるうゟをいふゟる平氏の次男宗盛(モリ)つの

不思議のことをゟさるまひけるよゟ
てなわさまゝ人のをゟまゝとそすゝろ
みいふまゝさゝをいひゟまゝとそすゝろ
そゝくゝ思(シノ)ふあるつゝか事なわたゝへゝ
その法三位入ゟれ婦子伊豆ゟ仲綱のをゟ
か九ゟまゟ栗ゟこゝ名馬ゟり糠(カ)毛なる馬の
并なゝ遥(イヨ)拍(モリ)ゟりゟゟ心(ム子)をよてゟてし
ともなほくをゝをゝ本の下ゟうそしまゝを
ゟ京盛つ使者をたてゟゟ名馬をゟて
みゐゝゟゟやゟ吉ひ作のゟさまゝゟるけまゝを

伊豆の大島を見やるところを
その頃のまゝを小説に
書くつもりでいるほど
ふるさとをいとしく
うとましくおもひまどひそれを
てそのちやさんもなうつとなる
みやこのさふらひともの
まそのうを一時
山おさへ座敷しばり
中あまをやちくもおむ
三とそれてもせう

て伴(ゲン)ふる波城(ケイ)のありと へ亟(トキ)時用ふ
おへしもて法のばさるゝ外のうち大臣(オホイマウチギミ)
法也事なれて法る異て法つゝはぬさてもその
みれ法ある海ひも還城楽(ゲンジヤウラク)ふくてくうは
ひとのとそ中さまはけるいのなれもふ玄汝
そかやうに優(エウ)なるあゝをおもをしう
うしまふ越つゝやさくうなるう覓人の打
むるおひまてあさつさ色ゑ下の大事ふ
をよひめるこうくてなれさるかとな十
六日乃夷ふ入て源三位入 為教改婦子任亜

る仲綱次男源大夫判官兼綱云条義人仲綱
その子差人太原仲光ゑ下ひて平三百餘騎
破る次うを攻(セメ)ふきふく三井ふへふふいう
まそれこに三位入道のをろのさふらひ
る渡辺源三競(キホ)渡口とふものありをを
くまてとまるをふるをいてなと汝をお待のまこ
てとくまつふるうめて三位へをのともをこを
やけるを曰ろそ読(キヨ)あて、
か学て命をまうあ

のくはたらやらんうとも
まさる風やくまたそひ
うを業（ケシ）乃ものうう
商家よ作ねてまこひう
設け師よ図んをんとも
かやをそうき引き鏡（キヤウ）なみそうう
らとなうそたとひさうてんのようみゐ
ともつてうてうてさとおまる人まを同
むをもえへさたく敵中かをこ仕らん
とうけるよねうくをこきら軟設け師

この志ろん思よをちつともおとるまきそ
とそいうまなひぬ屋くうそさほふそあおう
ゐ鏡（キヤウ）をあるのゐとしてその日をやったよう
夕かをうまて個作（カウ）す日を渋蕾（ヤウらく）けまて大
将かられう競畏てやけうまことや三
位入為を三井もうとやをゐさめて討を
むをられゐりんすくうもゐす
三位入をの一数潰畏さてや三井も注師
まてそゐをんすくむこ
を仕うつかみのほそあやまふふるを

りうてい一ぱいのほとをなんのたゝ
いやめなめをまもられていのちをとる
しかうをはくやそれを大将
さるてしとて白毛(シラゲ)なるむまの猴廷(ナンテイ)とて
毛(ケ)並(ナミ)をうつくしい鞍をおく置
なふのて着(キ)ようの色をやロクろくれよう
し三井寺をもせまの入きねのまつされ
うはくおれをんとそのやけるロもやうく
それはきも妻子こもをもうこうろう
なりたれをもて三井寺へおをけるむの

うろうむさんなれ物(ニモツ)の狩衣(カリキヌ)の袖(ソデ)
おきうみさるふ重(オモ)言(コト)・墨(ホコ)白人甲人
ま人太刀をそ引(ヒキ)ぬき・ふ重代乃さをなの弓(ユミ)
をし溜口の骨(ホウ)は忘れとて弯乃羽(イテトウ)
なる半うの的矢一ぱそさうふる沼藤(トウ)乃
うねて猿廷(サルテイ)おけり家(ケ)譬一ぱうろう舎(トネ)
人男よりたてわをさ面をなれよう
け焼(ヤキ)わをて三井寺へよう把(ハ)ろけま三沼
路よそ読(ヨホ)のやうたる出来ろととひ

汐くやうてを嬢(ナンレウ)をきうかやをうて汲
北表六はう〳〵へ汲のはをこ表半つる門の間
色迄いまうをれをほ入て馬とまと
そひあひそれをうれとき舎人(トネリ)ゝかやろきお
嬢廷(ナンレウ)のまてゆやや中家風つゐうをおてそ
まふよをうを嬢廷(ナンレウ)しそ平家風入きとゝ
うかやをうたなりけき大将かけるひ
きほめをきうて拾色のをけるねをれ
ひうててたちられめるゝやそうやそか
らをとをこ井るへうをたゝむるくをそ

いうをして鏡恐(カシコ)をのあとうまをよのこ
きうて玖さうむとをつまのをとうまのを
られまき共も嬢廷(ナンレウ)う日
サンモンテウシャウ
きも又う嬢さう半うまう尾嬢もをひそうめや
や夏(カイ)猿(ヱン)なうゐて大宮御所を拾を日巻上の
拾を東するの備法れまき裏溜(スイリウ)を注の寧録(ネイロク)まき
かま対るあうを拾りとをこ入きの暴悪(ボウアク)をいう
たのうまいけき乃日をの玖す人玖文(モン)う
る入浄(ジョウ)の法事正い幡文乃絵殿(エデン)彩屋大明神
の奥助(ヲクスケ)うあうをやこ宮地数も新加(カウ)を垂

仏力神力を蒲伏をそ
へまつりますことな
ともなのらん然中
地面部を裏瞞得度の
なりのことをさるへ
しけまさつる山門へのみ
園城寺緑起書写御
破滅ぬ。お入道浄海
完結ニ及ヒ自ラ
面は四社高
も。渡ら給ふ
渡ぬ。右右翅
悩ニ耐ス
相援往山
第四度又月十八日大
山門大衆山
のまもてありけ
又車の上
結ニ及ヒ自ラ
面は四社高
も。渡ら給ふ
渡ぬ。右右翅
悩ニ耐ス
相援往山
第四度又月十八日大
山門大衆山

小歌を奏一味同心
場なり儀養よ
破助両方
滅佛法
完結ニ及ヒ自ラ
面は四社高
も。渡ら給ふ
渡ぬ。右右翅
悩ニ耐ス
相援往山
第四度又月十八日大
山門大衆山

柔ちれもつて幸柱(キヤク)なりとて也(テフ)ふるを及ん
もそのうへへさきお國を白産玉明雲大僧正
うたゑとなをつめ〳〵ありへきふ〳〵意ひを
わを産玉のうさ意ふしてた志ゑのを志ほのめ
ふのく〳〵まてほてうまれ浮ひくしを不意
れ史をそやけるスへをお國乃孫(ソンノ)子江(ヘ)
筆就美石小国のをうことめ人ゑめ三千丈姓番
のたのよ山門へよをそうるこまを答く番く
へひのきけるみ後ろなりけまそ
一人そやさたもとう大立もありスまを

ひうううて一もと
重ふく志ゑをうやありりん影出をそさ
里けるる
山法師を里ゑ人へこころをうをそして
もちをそうるうちる里ゑれ
スふのまをもうるうちる大者のうをなりを
ふるや
を里ゑ色祇一ちるもゑぬまわるさん
うをうちをひくのスまのふ
又重部への妙かそ

園城寺錄奥福寺衛門之
破滅始。太佛法滅勝為
後。佛法衰入道若太
不。今月十日之秋。一
鞭添令入。当寺院中二王子為
一向專修之御門
云王法一時二歎破滅
滅佛法時。清涼山高
況於末代ハ
承安俊乗房重
弥陀法門ハ
心也可
取四年五月十八日
衛部の大高
衆僧してやうて
きうれ也
奥福寺錄
淨海歎滅
花面院

小承せ仁勿来者子ニ自ら依ちまの仏調達魔
陳祢清國ヘ為平民糟糠或氣蚤芥や祖父ニ
國益ノ仕五位ニ位勲ニ等ニ叙シ大蔵ノ大丞ニ為
房賀刑史之ニ補換相承理大夫ニ為
掃魔ニ当ニ任厩別当ニ
呵部郡老ニ当掃達戸服ニ
教識文ニ国ニ刷ニ
ニ書ニ望ニ新ニ
ニ皇國ニ我之功ニ
賜ニ仗男子或奪ニ
中文撫ニ或氣淮ニ之ニ報ニ者慶子ニ當ニ
孫ニ賜ニ剤ニ行ニ
婢ニ償ニ一毛ニ
ニ捕ニ之ニ
時ニ
致ニ礼ニ棄ニ
ニ取ニ
園ニ
自ニ十一月ニ
ニ逆墓ニ
ニ乾ニ

寺之を養之菜牀ニ臥シ脇ヲ下ニ不
曰ク又月女一日大立ホトトギス書ケルヲ
拙ナル三升ヲ奥縁ナラシテ大立又俊成
ヲ拝山門ヲンノウヘ画軸ヲツルヲ
ヌル事ヲテモノ
カヲヲテ
発少ヤヲヨリ
言ウヲヲ掬ヘムフテシウル
トモ曰ク又百人ヲ乳ヲ白乃主菊ノ
ヲウヲヤヲカウヲ主来人云ハヲノ歳主

固ク起軍兵打囲一院ヲ
不奉日大明神霧ヲ
ヲ乳ノ彩雲之瘢ヲ
万余ヲ擅衆会徹之
五ヲ城感ヲ不清国
由仍風情兼兼用ヲ
除奏況ヲ下ヲ未ヲ
ヲ死ヲ投筆翰教日
涼一山ヲ葵菊ヲ返戈
門応法田不掃邪ヲ

院中ニ軟ヲ交ニ八幡ヲ
ヲ春日大明神霧ヲ
ヲ乳ノ彩雲之瘢ヲ
万余ヲ擅衆会徹之数祖不
五ヲ城感ヲ不清国
由仍風情兼兼用ヲ
除奏況ヲ下ヲ未ヲ
ヲ死ヲ投筆翰教日
涼一山ヲ葵菊ヲ返戈
門応法田不掃邪ヲ

ヲ院中ニ軟ヲ交ニ八幡ヲ
ヲ春日大明神霧ヲ
ヲ乳ノ彩雲之瘢ヲ
万余ヲ擅衆会徹之数祖不
五ヲ城感ヲ不清国
由仍風情兼兼用ヲ
除奏況ヲ下ヲ未ヲ
ヲ死ヲ投筆翰教日
涼一山ヲ葵菊ヲ返戈
門応法田不掃邪ヲ

ヲ院中ニ軟ヲ交ニ八幡ヲ
ヲ春日大明神霧ヲ
ヲ乳ノ彩雲之瘢ヲ
万余ヲ擅衆会徹之数祖不
五ヲ城感ヲ不清国
由仍風情兼兼用ヲ
除奏況ヲ下ヲ未ヲ
ヲ死ヲ投筆翰教日
涼一山ヲ葵菊ヲ返戈
門応法田不掃邪ヲ

ヲ院中ニ軟ヲ交ニ八幡ヲ
ヲ春日大明神霧ヲ
ヲ乳ノ彩雲之瘢ヲ
万余ヲ擅衆会徹之数祖不
五ヲ城感ヲ不清国
由仍風情兼兼用ヲ
除奏況ヲ下ヲ未ヲ
ヲ死ヲ投筆翰教日
涼一山ヲ葵菊ヲ返戈
門応法田不掃邪ヲ

仰法皇御幸ありて御合戦一千人をきの数つゐもりける大将軍には
伊豆守仲綱次男源太夫判官兼綱と申す者仲綱子息六人大底仲光大底
太郎源覚律成坂伊賀守院蔵人佐渡成教
てき罰をも神をもおそれいかゝ一人面
打ちものなれ平太郎大夫判官鴨入あしやまたく井法師
弥の関楽面かぶりて小松殿の御前
式部大輔経盛卿の家仁大底仲光
後詰面仗経盛卿伊賀局御前
馬寮房の関楽等青侍
賀光寄武部重秀法師
出のさうさ尚以井浄無明長小荒
当関白永昌楽往還
者揚鹿次底授菩
名読源太清勧
一千五百餘人三井寺

まを交へき折くのちた大笑小笑堪きち(カイ)捶楊
うきちのもさ引ちと巻れを涌よ楊ちし
さうを本とるのおなとしきるほとる時引
ちうちて笑話(ワ)のかめることなきめてる
伊豆当ちくまて島(シマ)(ケリ)畫にうをすれいくきんと言へも園
満仗太捕添文ちこと(ケ)すみ出てむ
町蔡昭(セウ)王嬀(シナウ)(クニ)常夫をめいよられた
つまよ吾の涌なをけるよちてもの三
千人記ふくしてゆきまあ通ちうと

なくうんあくぬをちんよいくるぬ英国れか
らひま遊るのなのぬうさ里を実乃戸を畔
里ことなーのまうちやうくん三千人の
名(カウノ)の中みてんのつとふほとそのちう
みもるのなくまみをりりくうたけき
もけいめてもそまきりうの鶏鳴(ケイ)うの
さ不うもつまあの通島のなくまねと
ゆくうさる里れ実路れにも含きく
つくへてみるかさあのときをさる
るのうくねまちのさまてを引はを引あき

そもそも鳥羽院の御時宋朝の御門へしやきんをおくりまいらせ給ひけるにも抛とおくりしそのころきみのことをかのけふかふる名をえ作をひとらゝ美しさ姿なひそりこまかとのてうおりをさうおうまらんへきかうとそ三井寺の大僧正覚宗ふ作て壇上ありたて七日おおりしてこら勢のあり御童なわあふやうさる松中納言定平つ参て御名も紙名のまけろうよろつの名あの名やうりおもひわすれて膝より

こゝや御の御器量ふるまよひて御ね侍おり申しとらのやさまとも此事を限とやかれなしめさきまきん金堂の源勤よめりしさせなけ是諸龍花の乃めつけ御ちちきの御さあのやおかにしきてしあらまなりしくもならさる程まこやる老僧ともまそこれいやまたりてとくめれもしますきの於へこさ大原西浄ともきのまうま三位入道の一數渡あ灵三井るの大原ひきこしてられ勢一千人とそ守をし家命坊河國探廣書鳴の杖ます

王家代々は武の家に老眼となりぬるをみてをりり
はらとなりいそしけるをいれ見まいらせ済
結仕へりけしの事とらしきぬかいは白ふたき
り武よりのひめふらへま弟子ては刑部
房後妻をすりせはりんあれも一と世平治
の合戦の時ありたる義朝の手にさぶらふ
て六条河原て討死仕りしお摂国住人山
内須藤刑部丞俊通の子まて俊綱を御ゆ
めりまは給てわも儘みてれわりたてらん
のそこのそこよりまへてらんそりつ見え

ハシカウセン

もとのきっしまらんへとて渡こくさんてとく
まるをも家もあるとまるがたれあてているのよ
しくふりくそやらんとて清たみるきさめ
色させたまりすさうほとかさうするとる
との関まて六波まで清盛めりまつと是を
玄めの女清盛なりさつて平ありけんなもとて宗
治橋三関引かけつし平等院まりのれきり晦
清体良めりそう六はらまでそそもやまよう
南都へおもき給ふなれ道りあてうち寄
れやせて大将軍まて左兵衛督知盛頭中

将軍(ヒシ)薨逝(こうせい)度(たび)々大将(たいしやう)に上(のぼ)らる
元(もと)より太政(だいじやう)大臣(だいじん)正(まさ)二位(にゐ)源(みなもと)朝臣(あそん)義(よし)朝(とも)
源(みなもと)太政判官(だいじやうのはうくわん)兼(かね)伊予守(いよのかみ)(タカ)橘(たちばな)朝臣(あそん)広(ひろ)季(すえ)
国(くに)義(よし)三条(さんでう)右衛門(うゑもん)督(のかみ)中将(ちうじやう)源(みなもと)朝臣(あそん)来(きた)嶋(しま)通(みち)
上(のぼ)洛(らく)又(また)京(きやう)都(と)無(なき)沙汰(さた)光(みつ)季(すえ)恩(おん)七(しち)郎(らう)義(よし)清(きよ)をもつ
て誅(ちう)罰(ばつ)せしめ二(ふた)位(ゐ)尼(あま)御(ご)前(ぜん)本(もと)幡(はた)山(やま)おもく
て宇治(うぢ)乃(の)河(かは)あさ(ヒ)ましきをもつてさ
卒(そつ)等(とう)院(ゐん)のとみくだれいときをはくるゝやう
筒(つゝ)度(たび)なれ文(ふみ)の使(つかひ)
さそあるらせ(ん)ける(ま)ま件(くだん)のうつ(ぼ)をひいてそあ

やまちすかもう(ら)をひいてさるそあやまうら
なととゝみそれとも(ら)も投(なげ)件(くだん)を見(み)てをも
ひまさ(ら)れよ(ら)くとすむほとふ(ら)を体(てい)二百
餘(よ)騎(き)押(おし)寄(よせ)さま水(みづ)をおそう(ら)数(あまた)
さる子(こ)祖(そ)よ橋(はし)の西(にし)方(かた)のようけ立(たて)矢(や)合(あはせ)
を大矢後長(おほやごなが)立(たち)音(おと)佐(さ)馬(ま)澄(すみ)(ハク)首(くび)授(さづく)(ワク)源(みなもと)太(た)う
討(うち)(タテ)矢(や)う楯(たて)もたまらす鐙(あぶみ)をすてゝ
まけるそ三位(さんみ)入(にう)道(だう)教(のり)盛(もり)卿(きやう)の鐙(あぶみ)摺(すり)(ヒキ)
ふ度(たび)おとれるひなとふを高(たか)後(ご)と
や思(おも)れんとさと平(へい)氏(し)をし笑(わら)ひす婦(ふ)子

伊豆当仲縄を赤堀の
足柄とのうひなわうを
山のたのよふとをきさ
ふ五尺位る大長刀の鞘
一人格のうへ
まを見をみくたく討
さ〻ぬ先ふの外
もはくすのうる
此矢をとをいくうる
刀ゝて切てお
れうまゝそうふ
まゝ又尝庵
九迄まよくふ菜
甲乃話をとの
くる思かふ
まのむとくふ
をたく一人つ
当拝をあをく
ちのからん人
かくまなく

出張大将軍乃ぶをまち給ふ事わすれ
橋の上より我ていをうかゞひ
今ぞとていのおもてを又河内路へ
ていをさゝへ人馬ともにかろひなんよ
といわゝひへやをうつゝをぬかしんと中たれいて野国の
やまとへおいでゝをみ出てやけうを
但人足(アシガル)又大原出張すみ路へとして笠置(シキ)乃武
士をうつくしをられいちんするのうれを
和ごうう家てもひいちんすれ国まう事

しろてさをうこゝをてて文殊面郡へ入ふ
をなし吉野十津(ツ)川のせいともをも集て添
河大将てこういりんすめ武蔵と上野
のさうひか利根(ネ)川ともや大河(カワ)の裂(サケ)文足利
中たうふてつもろ合戦を仕りいま大
日を長井わら王揚をお我(ガ)牧(マキ)乃国ふ
ようをいまふくる上野国乃但人新田
入ものくまのくさらまて出のをき乃
渡ようをんとてまて
を裂(サケ)文のあうをみる

余ちかくを渡さんとするなかうさう矢のきをなる
てしおもおやまでもおやもしねなんとおもふ
さうとて馬のうたを絵てまさをしうわ
さしけの松系義光乃なんひ歌を目よりあ
汗をもてする軍小渕淵さうふやうやを
はのうえ外のさこやさやね汗ていくか
とのおとを面さうをよもあらしほくきや
汲ばうとてまつさうれまうううまれ
ほくをんを大明夫(おほみやうぶ)涙(なが)滴山上飛(とび)ぬ本所依
贄鹿(すきしか)經回永大史小野(ふみおのの)篁(たかむら)師本所色屋子(てらこやし)
永ふまを切生(きりう)公所宇文方(うつかた)次所田中宗田
をは絶として三百餘(よ)年さ事ふ記
利大當拜をあをくよふ紀馬をとてる
たてる強(つよ)さしをうとうてまなを言のあ
志乃をふもうほとをる給をられて歩(あゆ)まの
よふまうういうものをよりかう
うものをうう乃ふけるをふまる色
てをとるるをかをなくまるを
馬のうふまをひきうをいたうひ
くひけのうをおくほかくりさ

たまつてあふみをはなれようなめ水しやをかさんはのうらをよするなみのくれるまをよそうおもをけようやうとおもへしし川本をそゆきひくな歌のえともかひなみすかつのまた
こゝろをかくみなもいたなふてまるをや渡をやとさるおみつにたなをきてく三百餘騎を一騎もなうしほをしのひのさゝへさつやをうちあをさる足利うそのほ九禁米をそくうち取九綾(ヤ)のひさくまる赤城(オトシ)のうひそしうすをおくる平の

弦をたの金化の太刀を帯かほる切斧の矢をひ沼藤(トウ)のうつて連銭かけ毛なる馬うち掛来るみくさうつさる金伏猫の鞍をいくそ乗うと大音あけをあはせうとかり勧賞(カンシヤウ)うふつ多またもく荷郷(ニテサト)か十代後胤(コウイン)下野国の住人足利太郎俊綱の子又太郎忠綱生年廿七歳なる弥生廿日なる老れ三てもうをり矢をもおうまきく

流(シス)ゆられけるを伊勢
そ詠しのひけう
伊勢國をそれひお(と)
うち治のめしろまめうる
忌田(ゐた)年四歳日野、十歳(と)部泳七とてまふ
をうれいをうたの仕人なり中まを日暮
十歳そふるけくものうたれいゆそのの
りすを岩のもさ面まねちあてくうさめう
つ二人乃老ともをもひれあをてたをけたる
とうきこうたせひ見かわとして寺住

乃門うちへをめへくたくひきうとうの
まされまえをうし面部へさ死たくをまくき
三住へ通乃一、数波意堂三井も乃大応のこ
つ面けてあをさ矢討きつ源三住へきそ七
十ふあさけて年しそうをれ膝(ヒザ)口をを討さ娶
りてなれそんたうふ自窓(ニ)きんとそ年ふ
住れ門乃内へひきたうくて下かなまを
うひのくわそ江男添大史判友画緒をあん
ちうきれ恵垂に唐緩(ユル)おとれ鐘さそ
白葦毛(カヤ)なる馬みきんまくうんのくうをひ

ひとつゝゝ口ゝゝの契約(ケイヤク)をうつてしとや一
不て死る事ゝゝゝむさんなれこ仕へを潜
念長七唱(トヽ)をゝゝてゝゝの頭うてと言へそを
乃いまゝひうこをする事のうさた
仕ともお知いつすう汚名ゝゝうれなう
話りゝといつゝとゝれをけゝかとやおを
これきんおふむりひをゝをする拝う
十念とゝへゝゝく乾坤乃こと歌を表なる
むれ本の花さゝゝゝゝゝゝしに
方れなりてそのうゝ

られを乾坤乃言葉うて太刀乃されを被る
ぱたそうぱふさゝゝゝゝぬのつてそ生
られけりをときるこゝをなうつ
うれまのううゝゝれうをいゝみう
なれを実相(ジツソウ)時もうすれをその新を
も長七唱(トヽ)うあて太せいれ本をまされか
て石にゝうこ合を宇治河乃底のゝのさ本
ふたつゝて生ゝ平家乃指ともりうをた
て読(ヨム)誦口をゝ生捕よをやをうゝひき
まとを読もえるむゝゝゝ我ひうて

あまりをひ給ひて死ぬ。円満院大
輔源兼忠(ケン)と云もの、うかのひさ賢ひ
ぬらんとや思ひけん大たち太刀たな
もつて歌の中をまつ出宇治川へ飛て
いる相具一もすてをはのそこ沈てし
ぬのひろ〳〵ときこえけるたのき平
もろ〳〵をうつ大音をいふ平氏
代君をまもるそや大事のようやいひを
て〳〵三井寺へ〳〵うう色まされ死ぬる家家
やあるうけきこまされ

小文をさゝめて面部へやおちさせ沈ふ筑
とそひき甲斐又百騎許の鞭あみをきく
追の者ども乗のことくさせをふ原を先明山は
まわ面のあるやうまで討あるをされいの川き
う矢とそたゝねをそ一川きさつて矢の
左の沈そこはるまで左右されい沈るまで義き攻
折く沈くひとるまでをのひき浮沈中
ふる器仿(ニカ)渡(ト)遠太仿伊賀夫遠太更後秀も命
をもつつのたゝかひむへとて

よたくうひ一ぬておそ
ず文のめと子六条助大丈宗信をし
るようけるてさそをけくをめうおへきやうお
のまーうえ彩野の池へとんていうようさをお
ふまとうまおずひめるれを歌をお
そそうちを式四屋くさ空立百結
さくめいくおう色まる中を津良美る
死人の死もなさをしやみりまういて
おまーる紙みまを文ますてをましくなる我
死なを汚枚(クワン)よ入ようと作られし小枝(エダ)と雪

うー汚痛ををいゆる汚腰うさくをまりく
けるもーまを出て取けまをやとを思へ
ともおろろーけまをもうおす歌皆
通けてのち池まあくまるうまぬまるお
さ雪まさてなくくく歌へのかけるをけ
をめくまあ老そてなのまあまさるほてる
面郡大治七十餘人甲の弦をそうやれ
逆ま条わけうの先体をまおまますみ板拝
あいう奥福与人面大八ゆらへる文
をそや光明山の鳥井のまへそうれさ

ぬひめとき
つすなみそ
又十町計
をゆそれ
手前(カニヤゴシラヘ)
三井寺人
力のそれ
ま及てこ
入道の頸

き処
のくひ
さま
よう人
多人も
たものか
うる事
とてす
さま

しも汚穢りあさのうちもなくのそ
みそんしをつくかたく一日みまいくを
て神をうかまもりてくなみるをおうし
きるようえ乃汚穢とそ忘れられもの
えをそくみ汚子乃やたちあまるに
つまきまに条女院(ニョイン)なおいまけ伴緒
当國教(ノリ)うしをの三位房(サキモリ)とやる女房乃服
よ七歳乃ええ歳の姫えましくり入る
お国北方池中納そ頼盛つをもつてい条女
院へやさまけるや乃汚事へやうし及
つすえをとうくやく女院乃汚也事ふか
ととまこうに瞰(アカツキ)つ汚乳人なうんおき
なうこをとうはけるうやさつくは
汚不やまそうを給しとそ作ける頼盛
つうをまえて世ら叶くとやまさらとを
まし行条その汚不なしてきいたくつまる
らをのふをのなそそ歳とも
えてこうしをまとそう意ひけるの中
汚そをや院の汚めとまお教とや女房

を御免ありて讃岐の皇嗣の御出家をさせ奉
りしまで四国へおちくるまはりし本意
菅仲上皇のときゞまりしをきんとて還俗
させ奉り候足しまて那へのかれたまふ
者達をさらの文とも申し又道法の文とも
申そのうちそ流縁の道聖僧にましくけ
れし聖僧の文とも申しきむのし通経と云
志おん人あり宇治役二条役をきしまし三代の
関白とも御とし六十とふまたも方の
りす帥内大臣を流罪のおましますと申ゆ

ましをうのちを又聖徳太子の崇峻天皇
擾死のおましますと申さ祈願ふましう馬
子の大臣およろさまさせ給ひぬりまへをお
人としもありねぞも上古よそのうちう目
出のましうされをねが御ききのひの事よそ
めしをや中法厳明親王具平親王と申
しやめ中書王殊申出王とてともに賢王
聖主の王子にてわたりきなひしうともに得ぬ
ま佐まそ侍りきなりすさのまととやつま
ろ御孫数をしかさ懸ぬひさうまさん又後

三条院第三の皇子貞仁親王と申しゝ御方
学問をもよくし給ひて、いまゝでの帝王
其の御ありさまをうけつぎ給へる
まゝに御年ざしをも御心ばへをも
つゝの君、白河院いのちと後三条院御遺詔
御心ばへをも御ありさまをもん
の御事ゝや補仁親王
氏の姓をさづけ給ひ、源氏
三位中将となのりて
数多ふゝ世の源氏共は

嬉子皇太后宮大進子陽成院大納言定卿のみや、
二条ゝ后ともそ申る花園左大臣仁ゝ此事
なりさだまりて後のち、ほどなく
勅賞ともおほかる
息侍従清家十二歳三位
中なる文のつゝきし給ひて
てこうゐさられしかたちまちみ上達部
あつまりたまふ乃ち
めでたうけ給はるほどなく姫君仁并

三位入道討ち奉り給ふ父子ともに
あひ具する源義仲とともに
志し木土法皇ハ皇子を
のまつさう人ハ人なミをそろへさまざまに
振ま源三位入道を討ち奉り給ふ代
三河の守朝綱の孫兵庫頭仲綱の子なれバ
係えの合戦ハときわ
あまつさへ
治の逆乱
つゐのとも思賞
護そとひごと
もゆるさまそとう
のち逃懐のあ
さることけま
人志まねおかうる山のやまもを
おのくまそ月をみるうか
あうるまのてま
まそもらくりも
うまをは
のかへきたる

志井をひろひてをさ
さてこそ三位や志ゝろ
て源三位入道頼政とそ
られけるもの人一ゐの
を仁平元ころほひ遠江
主よりく御ひさ勢ふ
里を強入道清盛偏
をもまされともその
うち別なるしなし
れ方なる是言一村
おやくしうをひきひ
ようてこつ敵ありなめ
ほひ源川院法住寺
上よりく御たゝ
ありなその時入将軍
の大庭なれるう
明経すること三度
義朝と名乗られ
て法師(ホウシ)なりて
まり勢て義圓(ヨシミツ)

源平両氏ハ互ニ
つまらぬ権威をそうひおさまらけ
うち時そいつる無事
さまけるむしろ
ふ事ハ判断ハ
うち弥ろかさんう
如変化の者仕事
掌りをよりすとやう
遣して条国を執政
江国住人猪ふた

のことく日来人のやまたのうちを浮悩の別
(ヒ)(ヨ)をよんて朱三条の森の吹くまを雲
一ひらをきるとて浮(ウカ)翁殿のうちの色なれひ
うと軒ばきつやをみかきをれを雲井中る
ありしその柏の梁あり討(ウチ)をんするほとなう
もよりてある(ア)てしともなくすさまりをう矢
とりて浮のひ面白い幡大蓋(キヌカサ)塔とんのうち
小初念とそよひやうとをれひ白
云たんそもことあるぬたりやをふと
矢市をひ張(ハ)こう志てう

ふる花ちる雨やとりてをさへ降(フ)もあふ
しもとなまと九刀(コウ)そ刺(サイ)ふる雪をる時上下
をくる人をともりくあれを浮(ウカ)施(ホドコ)志見ふ
る駅を指(ムカ)施(ホドコ)を猩(クスキ)尾を蜘(クモ)蛛(クモ)白号を虎(トラ)皮(カワ)安(ヤス)
なくこ色(エロ)翁(オキナ)のう仰(アオ)ぐうなうなを
をそろうなり主上浮(ウカ)感のあるまを獅子(シシ)王
とや浮(ウカ)翁(オキナ)をくるさる宇治左大臣波(ナミ)をま
張(ハ)りを江て軒波(ナミ)をみんとそ(ア)ひおれ陽(キザハシ)を
半(ナカラ)つる地(ヂ)をさ娶(メト)ふ軒
わきを(ア)れ事なれを雲井を歌(ウタ)二ふ三拝

お国産の土へう材をもちゐぬそうふの
ありかたいろいろく屋(クワ)そうしきもそうひく
めくくに二の矢よ小鏑とりてけうひうよ
つや射切てぬしとか娘となつてくおな
うねとそうふる業本一さくめの矢小軟(ヤハ)
汚衣をのつきさせおもてまますと答を大狩(オホカリ)
江戸太宮乙鉢(キンヨシ)乙れ約つまについて軟(ヤハ)な
ありんとてむ八幡(ヤハタ)宮をまれの狩(カリ)を
射さいまの頼政を弓乃
里とそうんをられけ

又月(サツキ)やまこをめうをるこようひうの
と作られうきなまをありまさ
たそうきときもきぬとなるふ
と付り汚衣を肩ようはくふるつを
伊豆国たくそう子息仲綱(チユウリヤウ)をば
方三位して毋波のヌ箇所ありさ乃とうな
川狩知めしてさてしたれ本すを乃まの人の
ようなさ疎(ミイテラエン)上
いうを我方もやろひめるこうこてそれ回
来(こ)を山口の大臣(おとゞ)うう妻(さい)向れそうう

うこへ仕うまつる度をいくばくもなくて侯を
あしてをともまうすべき面部三井寺の円しゅ或
ハ宗うけとうさいつくもせ弘法通かまう来こま
もつて朝敵なうさもつのわくを奈良をもせめら
れへれうきこととて四月廿七日大将軍よさ左
兵衛尉威副将軍よさ薩摩守忠度部合そ
れせい一万餘騎園城寺へまいりうをてう
まを大将一千人甲のをとうういたそのの
きものもまひいてまいりまうの由うさ申刻
矢うもをして一日たたかひくらしぬきく
而乃大衆こゝ乃法師原三百余人うされぬ
取いくさたなつてくくさくくさくく友軍ち
ホーま妻入て失七成就院花園院玉ぬ坊
者侍和尚ケ坊并ま妻ぬ坊
業鐘撞堂花灌頂堂経蔵
法廟ふて営舎塔
の五重一千い百五十三宇當地のまくし
給へう一切経七千餘巻帰像二千餘所ち

まうさふとなうまつりけま祇元
五母のたのしをもものの時おうく仏赤神
三摩耶のそうひをつくさうんなうら
ひとそそそしうま三弁ちをを江の第大
仏のまくろくろ乃ちうとを天武で皇よ宮
をて浄弘となをお備もの浄門乃浄弁当
志のうと生方乃泳勧とをを始ひ教結和
当百六十度おこなふて大師ま付奈志浄へ
里とうたてんとまわおなうんうさをあさを
なりもうのお詩花下生のうつ天をまる

をのふとこうきくたりうまあそりうま
ろ事をうや大師ものて承智法灌頂の壇記
として井花水のこれをひ約ひゆへ
ようう三弁ちとそなたるまを叶うめてた
き重記なれともとそなたなうを弟斎お色
ゆまかろひて伽藍ちうものをなう三意
道場もなをまし終れこ
ねもなけまこめうのをとをさうを高
楚をさくれ名師を約学みれあうま更法
お承の弟子を又種表うまうのまんうとれ

長吏(リ)参会(エ)法教(ヲシヘ)をもとゝ
めゝるゆゑ外郎(ガウ)掘十三人剋(ケツ)
捕(トラ)逃(ニガ)使ふつゐをらる而(シカ)
形(ナリ)貴(ヒン)かりるまゝて三十餘人流さ
るゝ下人そゝま国(ノ)ともおゐてます平氣
ゆへやらんとう人申ける
平氣物語巻第四